

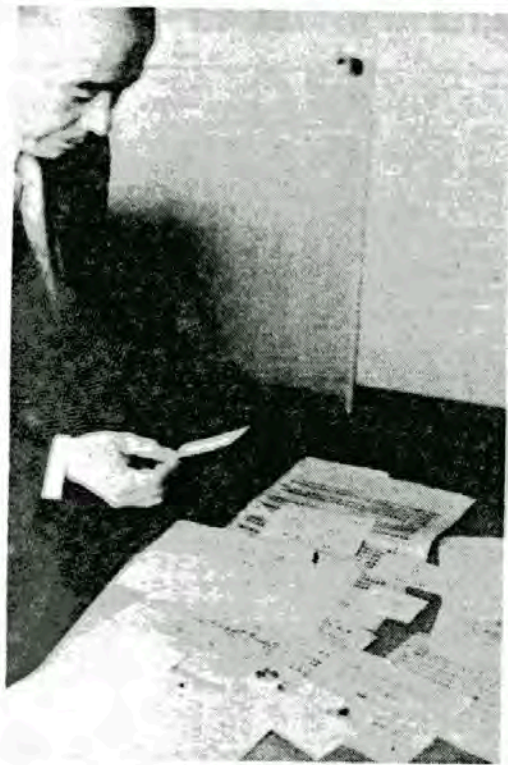
旧長崎
医科大
爆死病院長の遺品約25点

36年ぶり里帰り

東京の遺族 文化会館などへ寄贈

三十二年前の原爆で爆死した当時の長崎医科大学付属病院長、内藤勝利教授(当時四十二歳)の遺品が二十三日、遺族から長崎国際文化会館(長崎市平野町)と長崎大学医学部内の原爆被災資料センターに寄贈された。同文化会館は、早速、遺品の名刺などを被爆資料として展示、保存する。

寄贈したのは、東京に住む故内藤同大医学部にことし入学したのを、欲しいと申し出た。故内藤教授の妻、幸子さんと、孫が一機に、被爆の地で遺品を保存して、教えずで、幸子さんと親しい西



森一正同大医学部教授を通じて寄せられた。

遺品は被爆当時、故内藤教授が身に付け、身元発見の決め手となつた名刺や血液型を記入した爆死証明書、医大本部発行の家族あての遺体発見通知書など約二十五点。故内藤教授の業績など學術資料は医学部の資料センターへ、その他は同文化会館で保存する。

内藤教授は兵庫県出身で、昭和二年東京帝大医学部卒業。同大学助手、助教を経て、十六年に長崎医科大学教授。被爆時、長崎医科大学付属病院長だった。病棟一階の廊下で、助手や他の教授とともに空襲で焼けた図書文庫の整理中に被爆、即死した。遺体は数日後、ポケット内の名刺から判明し

届けられた長崎医科大学付属病院長だった故内藤教授の遺品

長崎国際文化会館で

「た、西森教授は「私に大学の病棟で

被爆したが、奇跡的に助かった。多くの先生や友人が亡くなり、特に恩師の遺品を扱うのはつらい。お孫さんが長崎大学に入つたのは何かの因縁を感じる」と話していた。